

第9回花巻リノベーションまちづくり構想策定会議 議事録

1. 開催日 令和3年2月20日（土）15時00分～16時30分

2. 開催場所 オンライン（zoom）

3. 参加者 策定委員 17名（24名中）、事務局 8名、一般参加者 24名 計49名

番号	名前	役名	所属等	参加
1	小友 康広	副委員長	（株）花巻家守舎	○
2	木村 直樹	委員（策定部会）	花巻建築士会事務局	○
3	清水頭 聖子	委員（策定部会）	（株）BonD Planning	○
4	長井 謙	委員長	副市長	○
5	松田 英基	委員（策定部会）	財務部長	×
6	中村 良則	委員（策定部会）	都市再生協議会長	×
7	上田 直輝	委員（策定部会）	花巻青年会議所直前理事長	○
8	青木 純	委員（策定部会長）	（株）まめくらし	○
9	竹内 昌義	委員（策定部会）	（株）エネルギーまちづくり社	○
10	山崎 満広	委員（事業部会長）	一社）クリエイティブシティアラボ	○
11	遠藤 元治	委員（策定部会）	富士大学経済学部教授	○
12	高橋 潤吉	委員（事業部会）	花巻商工会議所青年部	○
13	伊藤 直樹	委員（事業部会）	（株）花巻家守舎	○
14	高橋 久美子	委員（事業部会）	（株）花巻家守舎	○
15	福田 一馬	委員（事業部会）	（株）吹張家守舎、（株）ぼうけん	○
16	高橋 智彦	委員（事業部会）	花南水道土木（株）	○
17	伊藤 俊樹	委員（事業部会）	（株）大一土地	×
18	葛巻 徹	委員（事業部会）	NPO 花巻市民活動支援センター	×
19	照井 智子	委員（事業部会）	一社）ココアルバ	○
20	佐々木 江美	委員（事業部会）	SS 建築デザイン室（有）	○
21	似内 一弘	委員（事業部会）	一社）結学舎	×
22	茂庭 裕之	委員（事業部会）	（株）吹張家守舎	×
23	平賀 恒樹	委員（事業部会）	ファームプラス	○
24	土屋 昌美	委員（事業部会）	ツインズ（創立）	×

4. 議事録

照井：本日、第9回リノベーションまちづくり構想策定委員会にご参加いただきありがとうございます。司会を務めます、一般社団法人ココアルバの照井です。よろしくお願いします。本日はオンラインでの開催になりますので、開催に当たり事務局より注意事項等をご連絡いたします。

水上：リノベリングの水上です。本日はオンラインで多くの方々に参加いただきありがとうございます。こちらでいくつかルールを決めさせていただきます。一つ目、すでにいただいている方もいらっ

しゃると思いますが、お名前をわかりやすくしていただけると助かります、ディスカッションの時間もありますので、名前の表記をお願いします。発言するとき以外はマイクをオフ、基本的にはビデオはオンをお願いします。質問事項についてはすべてチャットでよろしくをお願いします。

最後に、喋っているメンバー以外はミュートでシーンとなってしまうのでできるだけオーバーリアクション気味で笑顔満点な感じで盛り上げていただければと思います。

照井：ありがとうございます。先ほどもありましたように、質問などチャットのほうにしていいただければ事務局も助かります。会議に先立ちまして、委員長の長井副市長よりご挨拶申し上げます。

1. 委員長挨拶

長井：みなさんこんにちは。今日で第9回というのがありましたが最終回ですね。スタートしたのは2年前の7月ですかね。その時、雨のふった花巻中央広場。雨の中だったんですけど、ちょっとした会合やりましたね。その時、伊藤ケイ子さんから乾杯の音頭をお願いされたのですが、その時に言ったことを思い出しました。そのとき、バスツアーをやったのですが、リノベに関わってくれている、携わっているみなさんは自分の言葉を持っているなという話をした記憶があります。言葉というのはつい本で見つけた言葉やインターネットで見つけた言葉など、借りてきた言葉をついついしゃべってしまうんですけど、そうじゃなくて、自分の中から出てきた自分の言葉を皆さん持ってらっしゃるな、という話をしました。

僕も2年間花巻にいて思うのは、行政の政策であったり民間のビジネスであってもそうだけど、人を動かしたり、感動させたりというのは、込められた思い、自分自身から出た思いっていうのが有るか無いかだと思うんですね。リノベーションまちづくりも、どういうアウトプットをしようかという時にはけっこう右往左往しまして。難しくなりすぎちゃったり、そういうこともしながらやってきたんですね。ただ、私はこの委員会は、リノベで花巻に関わってくださっている方の思いとか、例えば自分たちはどんなことにときめいて、花巻のどんなところに魅力を感じているのか、あるいはどんなことに生きることを実感しているのか、そういった思いを言語化することが委員会の使命かなと感じている。この委員会でも、個別のMTGでも何度も重ねていまして、私自身もお話に参加させていただきました。事務局も、土日もあり取りしながらやっていました。みなさんの意見や考えを反映できたところと、なかなかできなかったところとあるんですけど、皆さんの思いを言語化したものを作れないか、といったところでした。ビジョンブックをどのように共有させていただいて、これで行こう、というものをみなさんで思っているようにしたいし、あとはビジョンブックを持って、みなさんが今後どんなことをやっていくのかということを共有させていただく、そういう場にできたらなと思います。ですから最終回でありながら、次へのスタートになる、そういった会議にしていけたらなと思っていますので、皆さんどうぞよろしくお願いします。

照井：長井さんありがとうございました。では、早速ですが本日の流れを確認していきたいと思います。まずは、今までの振り返りとおさらい。それから、本構想についての説明。それからグループに分かれてのディスカッションを行います。それを皆さんで共有して、総括という風に流れていきたいと思います。本日のミッション。「この構想を活かし、主体者として『どんなアクションをしていくか？』を語りあう！」最終回らしく、ミッションが与えられています。ミッションの内容とこれまでの経緯につきましては、事務局の伊藤ケイ子からご説明したいと思います。よろしくお願いします。

2. 振り返り・おさらい 事務局

伊藤(ケ)：はい。みなさんお久しぶりです。はじめましての方はこんにちは。花巻市役所建設部都市政策課都市再生室の伊藤ケイ子です。リノベーションまちづくりを担当していて、リノベーションスクールを3回開催しましたし、このリノベーションまちづくり構想を、自分たちの言葉で語り合いながら、自分たちで作り上げていくまちづくり、そういったことに魅力を感じてこの仕事に携わっている者の一人です。3年分の思いが込み上がってくるので、泣かないよう頑張りながら話したいと思いますので、よろしくお願いします。

では、画面小さいかもしれませんが、振り返りをしたいと思います。まずこの会議が目指してきたこと、それからこの会議でやってきたこと、この2つをみなさんと確認したいと思っています。目指してきたこと、それはリノベーションまちづくりを実際にどんな風に取り組んだらいいか、という道筋をつくる。これがこの会議で目指してきたことです。花巻市は、立地適正化計画というものを作りまして、市街地の拡大を抑制し、都市としての機能、都市施設をまちなかに集約して各拠点を公共交通でつなぐという「コンパクトプラスネットワーク」というものを作り上げていくという方針をとっています。その時に、リノベーションまちづくりを活用して、活力があって持続的な都市づくりを目指すということをお話しているんですね。ここで、リノベまちづくりとは何だろう、ということなんですが、これは花巻市としては新しい試みですし、初めてやる政策なんです。これをやっていきたいのはわかるけど、どうやって実行していくかということはこの計画には書かれていないので、今回委員会として会議を立ち上げ、民間のまちづくりに意欲的に取り組んでいる方からの意見をうかがうというものです。立地適正化計画、コンパクトシティというと、味気ない言葉ですが、実際はこういう考え方。今、地方の人口減少が危機的な問題とされていますが、いろんな変化が起こってきているので、こういったことをあの手この手で解決しながら、住んで楽しいし、働いて面白いし、遊べるし学べるし、自分が自分らしく生きられる、というような、そういう豊かなまちづくりをしていくための取り組みの一つ、となります。リノベーションまちづくりというものを言葉で説明するとたくさんになるのですが、端的な入り口としては、今ある資源、空き地や空き店舗、遊休不動産を活かしながら、そこに新しい使い方をしながらビジネスを起こすことです。それらをコンパクトに集めてエリアの魅力を上げていく、つまり街中をどうやって魅力的にしていけるか、ということを考える、そういったことが今回の会議でやってきたことの一つになっています。

そして、もう一つ目指してきたことは、まちづくりの主体者を増やしていくこと。今いろいろな民間の方が動いていただいて、いろいろな変化が起こってきたんですけど、これってというのは、面白いことに取り組む人が出てきた、ということがそもそものきっかけ。遊休不動産はもちろん使うんだけど、花巻ならではの資源や地形とか、歴史、文化、そういったものも大切にして、しかも新しい視点で作っていくことに盛り上がって、面白がって、自分にしか、あるいはここにしか出来ない魅力を掘り起こそう、という方々が出てきた。こういった変化が先ほどの魅力的なまちになる、ということになって、そういった魅力的なまちづくりの主体者を増やそう、つまり、自分で行動する人、自分で発信する人、もしくはそれを行っている人を応援する人を増やす、ということがこの会議が目指してきたことです。

この会議で実際にやってきたことですが、バスツアーをしながら、いろんなインプットとアウトプットをやってきました。最初の会議は、まなび学園でこれからどんなことを目指すか、ということ話し合い、以来近隣の資源を視察しながら、断熱を勉強しながら、会議をしながら、3年間走ってきたものです。2019年はリノベまちづくりに関連して473人の方が参加しましたし、大小合わせて13回ほどの会議も

行っています。並走してリノベーションスクールの第3回目もやりました。今年2020年は、コロナ感染症対策として、直接お会いすることが皆無に等しい中、すべてオンラインで、合間に小さいミーティングを入れながら、オンラインで取り組んでいます。そして、2017年のリノベーションスクールをやってから2021年1月までに、新規開業が22件生まれました。赤いところは都市機能誘導区域です。最初のころは、2015年の小友ビルと2017年のマルカンビルの2つしか無かったんですが、初年度には5件になり、2年目には15件になり、3年目で22件になっています。

このようなムーブメントが起きてきたときに、これが民間だけに任せてやってきたかというところでもなく、間に公共も入りながら一緒に花巻というまちを作ってきたもので、これがこれからはまちなかを魅力的にしていく方法なんじゃないかという形で、こういった会議を繰り返しながら、一つのビジョンを作っていくというのがここまでの流れになっています。今日はこれについてもう一回振り返りをし、これからの話をしていこう、ということです。みなさんどうぞよろしくお願いします。

照井：ありがとうございました。続きまして、気になる構想の中身について、小友副委員長よりご説明いただきたいと思います。小友くんよろしくお願いします。

3. 本構想について 小友康広（花巻リノベーションまちづくり構想策定委員会 副委員長）

小友：はい、花巻家守舎の代表兼、この委員会の副委員長を拝命しております小友です。先ほどケイ子さんからあったように、「構想なんで作ったの？」というところをまずお話しすると、この会議が道筋づくり、要はリノベーションまちづくりをこれからやっていくための道筋を作ろう、というのと、あとは主体者を増やそうという2つのやりたいことがあった訳ですね。それをやるときに、簡単に言うと、我々の取り組みを全然知らない人、行政の中にもいるわけですよ。つまり都市再生室とか我々と一緒にやってくれている人はいいんですけど、じゃあ農政の人が僕らのことを応援してるかどうかというのと、「やってるよね」「頑張ってるよね」は思っているけど、「じゃあ一緒にやろう」、とはなっていない。でも「一緒にやろう」にならないといけないよね、という風に思っていますし、それは民間も一緒ですよ。民間の経済団体だったり、花巻に普通に暮らしている人は、なんか古い建物をリノベーションしてなんかやっていますね、っていうくらいの理解はしてると思うんですけど、それを知らない人にも知ってもらって、さらに民間の中では、自分が主体者になりたいなと、特に若い世代ですね、自分たちより若い世代が、主体者になりたいな、と思ってもらうためにはどうしたらいいか、という時に、1つこんなブックを作ったら良からう、というものを作っているという状況です。

ブックはまだ完成ではないんですけど、こんな感じで出来てきてますというのを皆さんに共有します。4章立てプラスおまけ、みたいな感じなんですけど、まず1章が先行事例の紹介みたいなことをやっています。要は、今回のビジョンブックは、行政が民間にこれやりなさいって言ってるわけでもないし、民間がこれやらせてくれ、っていうわけでもなくて、一緒に作ってきてるんですけど、すでに動いているものをより推し進めるみたいな形で作っています。ですので、すでに動いている人たち、先輩たちがいるわけですね。特に委員に入っている方たちがやっていることだと思うんですけど、こういった先行事例をまずは紹介していています。

第2章っていうのが、近未来、これからの未来をどうしていったらいいか、どうなったらいいのかな、っていうのを絵で紹介しながらやっているんですけど、ここで2つポイントがあるよねっていう風に僕らは、この委員の中でまとまっていて。「なりわい」と「カルチャー」です。「なりわい」って何か

という、地元民が地域資源を生かし、なおかつ働き手の生き方とか、まちの在り方、こういう風にまちはありたいよねっていうことを反映している事業・ビジネス。これは完全に民間の話ですね。それと「カルチャー」。これが重なり合っていくことによって、その土地ならではの、他の土地から来た人からすると「なにそれ？」みたいな。「ちょっとうちの地域にはないけど、良いね、面白いね」っていうもの。つまり、「なりわい」が集合体として「カルチャー」が生まれていく、みたいなものを作っていくべきだよね、って考えています。なんでか、っていうと、花巻はそもそもそういうまちだからです、っていうこと。先輩たちが、花巻のものを作ってきていて、なりわいとカルチャーが元々あったし、先行事例にあった通り、それを脈々と受け継いでくれている、自分も含め若い世代、30代くらいの世代がいるっていうことから、それを未来につなげていく。郊外はもちろん便利になっていって良いわけですね。便利さを捨てて、インターネット無し、とかチェーン店全部無しっていうのではなくて。郊外にはそういうのはあってもいいんだけど、まちなか、いわゆる立地適正化計画という都市機能誘導区域って言われているところに、チェーン店ばかりがあっていいんですかね、って。僕らってちょっと違うよね、そっちのほうがいいんじゃないの、って。僕らってちょっと違うよね、そっちのほうがいいんじゃないの、っていうことをこのビジョンブックで表現しているという状況です。

第3章は、具体的にどうやって育成していくの、ってこと。例えば、「行政が金出せばいいじゃん」。そうじゃないよね。なぜかっていうと、第1章で起こっていることは基本、民間主導、行政サポート。つまり民間が動き出しながら、それを行政が仕組みでサポートする。例えばお金じゃなくて制度を緩和するとか、警察に協議に行くときに一緒についてきてくれるとか、そういったことで第1章の先行事例は成り立ってきているので、それを推し進めるためにはどうやったらいいの？っていうのをここで書いていくんですけど、もうちょっと詳しく書く予定なんですけど、僕らはたぶん3つだろうな、っていう風に僕らの中で協議していて。

まず「職をもっと柔軟にする」、働くっていうことをもっと柔軟にする。つまり、事業継承したり、週5日以外の働き方だったり、相乗りで起業する、誰かのところに誰かが入って起業するみたいなことだっていいじゃん、みたいな。マルカンビルの横で焼き芋屋やるとか、マルカンビルの中に駄菓子屋さんが入るとか、マルカンビルと夜来香(イエライシヤン)が同じ経営者が経営してるとか。あとはmeinn(メイン)というゲストハウスの中に中華料理店が入ったり、風人堂という Book&Cafe が入っていたり、っていうイメージですね。働き方が柔軟になっていくっていうことをもっと推し進めていったらいいんじゃないの、っていうことです。

「住をもっと丁寧に」。例えば健康で住みよい住宅っていうのを作ったり、近隣の人たちとつながりを広げていく。カゲツドアーズ、吹張町の花月堂ビルがリノベーションされたものだったり、ひとしずくさんって言って、高断熱高気密の住宅が建っていたりとか、リノベーションですね。こもればマルシェみたいに地域の資源を集めたマルシェが定期的に開催されたり、みたいなイメージです。

「遊びをもっと受け入れる」。これは昔から花巻の人はやっているわけですよ。花巻まつりだったり宵宮だったり、道路を遊びのフィールドにしちゃう、というのをやっていたことをもう少し促進していく。例えば、いま Dprtmnt Skatepark っていうのがマルカンビルの地下にあって、それが道路にせり出してきたでもいいんじゃないの、とか。あとは遊びをボランティアで、支えていくっていう人がどんどん増えていくっていうのが、花巻おもちゃ美術館なんかもそうなんですけど。そういった仕組みができていくと、なりわいやカルチャーって育つんじゃないの？っていうのが僕らの仮説だし、それをこのビジョンブックに入れ込んだっていう感じです。

第4章が、「都市と農村は連続している」。簡単に言うとその話、「1、2、3章全部まちなかの話じゃん、じゃあ花巻市の大迫だとか東和だとか、関係ないよね」、っていう風になりがちなんですけど、そんなことないよね、っていうことをここで書いています。簡単に言うとなりわいが育つということは、地域資源を生かした商売がどんどん増えていくっていうことで、その人たちがやっている商売の資源ってどこから調達しているかっていうと、その農村部だったり周辺部だったりするわけですよ。つまりなりわいが育てば育つほど、花巻の東和だったり大迫だったり石鳥谷だったりから調達してきて、加工して提供するみたいなものが増えるわけだし、そういったプレーヤーの人たちもその地域で商売しやすくなっていくよね、それが実際実例として、その人たちはその人たちでなりわいをして、すでにそれらはまちなかの人たちとネットワークしているよね、っていう風なことを書いています。

最後には、データですね。衝撃的なデータで、毎年 670 億円以上、花巻市からお金が無くなっています。花巻が買っているお金と、花巻の中で消費されているお金の差額にはそれぐらいの差のお金がある。そして若年層はこれだけいなくなっている。でも希望はあって、ここにも書いてあるんですけど、高校生とか、わかりやすく言うと大食堂の署名活動した高校生なんかもあるんですけど、彼ら彼女らっていうのは、そのまちなかの、そのまちなかではの、花巻ならではの資産っていうものに対して気づいていて。我々、第1章でやってきている人と繋がって行って、じゃあ花巻に戻ってきたいよね、花巻と繋がってきたいよね、みたいなことを感じる人たちが増えてきている、っていうことが事実としてある。じゃあこの人たちを育てていくっていうことが、やっぱりなりわいとカルチャーを推進していくっていうことなんじゃないの、っていうことをビジョンブックにまとめています。

これを色んな人たちにってもらって。いわゆる行政の人たちにも見てもらおうし、東和だったり石鳥谷だったり大迫だったり、要はまちなかだけの話でしょって思ってる人たちに見てもらうことによって、「確かに花巻の中心市街地、立地適正化計画の真ん中のところに「なりわい」や「カルチャー」を生んでいくことが、花巻が豊かになっていく一つの方向性だよね」、って理解してもらえそうな冊子にしていきたいなと思って作りました。以上です。

照井：ありがとうございます。とても分かりやすい。たぶん委員の皆さんいろいろ腑に落ちたと思うんですけども、今、小友くんが説明した中身は、これまで委員の皆さんとやり取りした成果物になっています。細かいところはまだこれから仕上げが必要なんですけども、この内容を私たちの構想として、本日委員の皆さんからご承認をいただきたいと思っていますが、ご賛同いただける方は挙手とかOKとか、画面上でリアクションをお願いしたいと思います。今小原くんが一生懸命スクショ（PC画面の画像）を取りますので、その姿勢のままお願いしたいと思います。

（出席委員全員挙手）

4. ディスカッション

照井：ありがとうございました。では、次、ディスカッションに移りたいと思います。今日の会議では、私たち委員のこれからのアクションを話し合っていきたいと思います。3グループに分かれて皆さんで話し合ってくださいなんですけども、この構想を使ってどんなことを実践していきたいか、っていう話し合いです。今日、最終回にあたって、2018年から構想もスクールも一緒にしてきたいただいた青木さんと、エネルギーと建築のエキスパート竹内さんと、それから対話から産業戦略まで幅広い山崎さんも参加されていますので、積極的にこれからの花巻について意見交換を行っていききたいと思っています。これからブレイクアウトルームに分かれていくんですけど、自動的に分かれて飛んで行って、だいたい

20 分後くらいに強制的に戻されます。そのグループ内で積極的にご発言いただけると助かります。委員以外の皆さんはこちらにとどまっていたいただいて、先ほどご紹介させていただいた構想についてとかの質問も受けますし、これからのアクションについてご意見なども頂戴できればと思いますので、ご興味ある方はぜひ積極的に発言していただいて、その間トイレ休憩など自由にとっていただいて構いませんのでよろしくお願いします。それではいってらっしゃい。

○ディスカッション

<策定委員グループA>

参加メンバー(敬称略)：小友康広、山崎満広、高橋久美子、佐々木江美、高橋智彦、伊藤直樹、遠藤元治、佐々木大地、中島明、澤田利徳、小原紘

小友：グループAというくくりなんですけど、私がファシリテーターです。先ほどお伝えした通り、道筋作りをして主体者を増やすために我々ビジョンブックを作りました、ということなんですけど、このビジョンブックに書いてあることに、これは市としても民間としても、こういう方向で行こうよ、と言ってもらっているんですね。その中で、じゃあ私こんなことやりたいから協力しても、みたいなことを、自分のやりたいことと、それに対して協力できることをここで言ってもらいたいと思います。別に言ったからといっていつまでに何をやるのか、という詰めるようなことはしないのでみんなで夢を応援しあうディスカッションが出来ればと思いますので、よろしくお願いします。

佐々木(大)：お疲れ様です。今店に来たお客さんが、金ヶ崎からこっちにスケボーしに来ている人がいるんですけど、仕事を、カフェ四季さんのところに就職したんです。滑りたいし通うの大変だし、お金もないから。どこか古いアパートみたいなところを改装して、住めるようにする、っていう話はまだありますか、っていう質問がちょうどさっきあって。

小友：いいね。スケーターたちが集まるような住宅、スケーター達がそこにスケートしたくなるような住宅を一緒に作る、みたいな、それはありだね。

山崎：スケーターズハウスみたいなこと？内装も。

佐々木(大)：まあまあ、やりすぎると大変なところもあるので、シンプルに住みやすく、家賃が安くて、いつでも出入り楽ちん、みたいな。そんなところがあれば、来る。しかも、キオクシアさん。転勤であちこちから来て、北上のホテルに一人暮らししている人がすごく多い。会社で提携しているところだからそうなのかもしれないけど、そういう人も柔軟に住めれば混むかもしれないですね。

小友：確かに、キオクシアに来ているスケートとか、カルチャーとかが好きな人が、花巻のまちなかのメンバーと混ざれる仕組みとかが作れたら。それはいいね。

佐々木(大)：今、見かけない顔だな、の人は大体キオクシアの関係で来ている人で。今3人くらい来ている。3月まで、5月までの短期（で来ている）の人がいますね。あとは沿岸方面とか、横手、ちょっと微妙な位置に住んでいる人が花巻に住みたいという話がありました。

山崎：やろう。

小友：いいね。協力しますよ。

山崎：テーマが決まって拠り所になると、他からももっと人が来るような気がしますね。

小友：市とかに協力してもらって、一緒にキオクシアにアプローチしてもらって、保養所とまでは固くな

いけど、こういう場所が花巻にあるから、キオクシアの人に配ってください、でパンフレット、っていうのも良いだろうし。ありがとう。他のメンバーどうですか。

遠藤：はい。富士大には1000人くらい居るわけですよ、大学生が。それで、北上との、まちのはずれというか市境にあるので。それで、彼らがほとんど出て行っていないというか、もちろん全国から来ている運動部はそうではないんですけど、3分の1は岩手県出身と多い。東北まで入れると結構いて、シンパシーはあるわけです、この辺に。なので、私がいま思っているのは、富士大の学生がスケボーし行くくらいがいいなと。

佐々木(大)：実は富士大学の生徒さんたちもいっぱい来ているんですよ。

遠藤：とにかく、まちに出ていくこと、まちで何が起きているか知らない学生がいる。行っている学生は、そのまま。そうじゃなくても、部活もやってなければ自宅から通っている、盛岡なのか矢巾なのか、もちろん花巻の学生さんもいるんですけど。この間佐々木さんのところというか、カゲツドアーズに8人くらい連れて行ったんですけど、やっぱり、2月に一回くらいは何かやると。テーマを考えさせて。まちに出ていくこと、ここをもうちょっと具体的に、私のゼミだけでなく隣のゼミ生なんかも入れて、やっぱり何かアクションを起こすというか。このビジョンブックにも書いてあるんですよ。学生とみんなが話し合うことが出来たらいいよね、とか。今はそういう風にはなっていないので。

僕が、初めて花巻来たときに岡田先生に連れてもらって、まだ閉店する前のマルカン食堂で、割りばしでソフトクリームを食べさせてもらった。いずれにしても、学生がまちに出ていけるような、今こういうような、この本の雰囲気も出てきたので、こういうことをやっているよ、と分かりやすくなっているのですね、そういうのを少しずつ増やしていきたい。

小友：ありがとうございます。これを受けて江美さんどうですか？

佐々木(江)：この間はどうもありがとうございます。学生の子たちがよく来てくれるようになったらうれしいです。よろしくお願いします。

小友：何か学生たちにこんなこと企画してもらいたい、とか、構想段階なんだけどどうかな、みたいなものがあれば教えてください。

佐々木(江)：うちでは場所貸しなので、一応有料にはなっているんだけど、学生の子たちが入って勉強したりとか、フリーで使える分に関しては、空いてる時間はフリーで使ってもらっていいよね、っていうことは話をしています。だから、まちにいく所があるっていう場所になればいいかな、という風には思っています。

佐々木(大)：うち、来月からスケボーのスクールを夕方を始めようと思っているんですけど、子どもたちが、空くか空かないかっていう微妙な時間に宿題やらせたいということがあって、そこ使ったらいいのかなと。

佐々木(江)：いいですね。どうぞ。

小友：はい、ありがとう。さあ他はどうですかね。まだしゃべってない、久美子さんとか。

高橋(久)：はい、お疲れ様です。さっき、キオクシアさんのお話出たんですけど、キオクシア関連の関係会社の保健室に週1で行っているんですけど、福利厚生を充実させたいんですよ、企業さんが。大きいところは。健康経営に繋がたくて、ただ時間内でどうしても、企業の中でヨガしたりとか、何か遊びに近いようなことって時間とれなくて、健康相談とかカウンセリングとかがメインになっちゃうんですけど。

そうするとね、遊び方がわからないっていうんですよ。今、その企業さんの部長さん達と話しているのは、空いてる時間に遊びに行ける場所を作ったほうがいいですよ、っていう話になっていて。今、自分の事務所を作ったから、とりあえずそこで色々やっていくけど、花巻のなかで起こる事業というか、学べるであったり、混ざれる、語れるような場所であったりというのが、こんなところにあるよ、っていうのを企業にそのまま福利厚生として渡して、そこから一般の人が。今まで私たちは何かキャッチしたい人ばかりに流していたところがあったんだけど、受け取る側もアンテナ張ってなければ受け取れない状況にあったんですけど、次の段階に入ったと思っていて。一般の人、月15万くらいの給料でやりくりしている人たちが、自分の小遣いで少し混ざれる、自分たちが社会に入れる、っていう窓口をぐっと低くしてあげるためには、直接企業と一緒に働く人たちのワークライフバランスを保つためのことをやっていきましょう、っていう提供の仕方ってこれからはありだなって思っています。

小友：ここにいる人、あまり知らないかもしれないですけど、久美子さんは今、保健師をしまして。保健師の事業もやっているんですよ。彼女マルチすぎて色々やってるんですけど。その企業の中のお抱え保健師みたいな、その企業の従業員さんたちの健康を管理するみたいな仕事をしているので。そこにアプローチしている人たちに、こんな遊び場あるよ、こんな場あるよ、例えば、富士大学の学生がいついつに来るから、そこに来てみんな話してあなた達の職業観を伝えてみなよ、みたいなもので、その交流をふかめてあげるとかっていうのをできるハブみたいな存在になっているので、久美子ハブによる、花巻の魅力的な人つなぎとか、コンテンツつなぎは、確かにいっぱいできそうですね。

高橋(久)：まだ、こういう動き方って見えるようにまだなっていないから、今年の課題はそこをしっかりと見えるようにすると、色んな企業が、自分たちから興味持って入ってくれると思うので、そこはすごくいいきっかけになるかなと思っています。

小友：Dprmentの何曜日は久美子ハブ企業が集まるレッスンデイにしちゃったら、違う企業の人と話が出来て面白いじゃないですか。めちゃめちゃうまい人たちの前でやるのは恥ずかしいなみたいな、感じの人が、遊べるのがあったりするから。久美子ハブデイ作ったほうがいいよ。

佐々木(大)：そうですね。それで、受け口をスポーツが選べるとか、やりたいことがちょっと選べる状況だともっと企業にアピールするのももっと強いと思うので。それこそ結学舎さんとか。結学舎さんって、県から助成金もらって、スポーツ振興事業みたいなものやってます、みたいなことで、ダンススクールやったりとか、あとはサッカーとかやってて。学校とかに、プリント配布して、こういった人募集してます、来てください、みたいなことをやっているの、その似内さんを紹介して、やればたぶん。

小友：そうそう、似内さんが久美子ハブデイに来てもらったらいいんだよ。おもちゃ美術館とかもね、体を動かしたいじゃなくって、土日行くとこないっていうか、暇を持て余してて、趣味もあんまりないっていう人にボランティアを紹介したりとか。つながりが地域にあると、それだけで楽しくなったりすると思うから、そういうのもいいかなと思いました。

智彦さん、顔出せます？難しいかな。じゃあ釣り大好き直樹さん。

伊藤(直)：そうですね、コロナで頓挫してるんですが、釣りの仲間がいて。最終的にやりたいのは、プチツーリズムみたいな感じですかね。良好な釣り場がたくさんあって。まちなかに、マルカンであったりメインであったり、そういうところがツーリズムとショップ、ツーリズムと宿泊とか、そういうところがびったり合うかなと思ってて。自分が楽しむっていうところでも、そういう仕事ができればいいかな、という風に考えてます。

小友：いいですね。久美子ハブに釣り部できますね。

高橋(久)：みんな結構メンタル参ってるんですよ、実は。休暇をどう充実して過ごさせるか、ということ。すごくその切り替えができるといいじゃないか、と思ってて。話聞けば聞くほどに、所属がない、というか。日曜日何してるの、って聞くと家にずっといます、みたいな。

小友：YouTube 見てます、みたいなね。

高橋(久)：そうそう。新しく友達を作っていうのもちょっと、とか、今までもそんなに人と会わないし、時間が合わないしとか、新しいことを全然知らない環境に来てしまった人もだし、そうじゃない人も、こう大人になってから出会うきっかけみたいなものにもなったらいいいのかなと。

山崎：そうだね。あとね、小友くんちょっといい？オガールの岡崎さんなんかもこれに初めのころ参加されていたけど、彼に僕、この委員会に入るときに、花巻の中心地に何が必要ですか？って聞いたんですよ。そしたら、友達とか、一人でぶらっと花巻に行ったときに、一人でぶらっとの時間にやることがなさ過ぎて寂しいんだ、と言っていましたから、本当にこういうハブがあって、ふらりと立ち寄れる場所があったら、しかもオプションがいっぱいあったらね。本当に素晴らしいですよ。

小友：おっしゃる通り。僕がまさにそんな生活をしてて、とりあえずふらっと歩いてると、色んな人と会って、何かが生まれる、みたいな。それが楽しいんで、まちなかに行く顔見知りがいっぱいいて、みたいなのをそういう人たちに提供できればいいですよ。

山崎：そうするとすごく地元感が出るよね。

小友：第二の故郷的なね。

佐々木(大)：うちがまさにそれで。うちらはボランティアスタッフが誰かしら必ず3、4人いるわけですから。絶対ここに行けば誰かがいるっていうのがみんな分かっているから行きやすい、みたいな。別に誰かと約束しないで行ってもあいつらいるからいいかな、みたいな。ふらっと来ちゃうというか。それこそ、ケイ子さんの作った公園とか、カゲツドアーズさんとかの、あの辺に、なんか、友達言っていたのは、あそこでいつも焚火とかやってたら、とかって言ってたけど。ふらっと散歩しながら、ビールでも買ってその辺散歩したら友達いるっていうか、そんな面白いものがあればいいよなっていう人が言っていました。

小友：僕の話になるけど、温泉作りたいなって思ってた。

遠藤：屋上にぜひ。私思うんですけど、郊外、大迫とか、せっかくあそこに花巻病院が出来たじゃないですか。そしたらたぶん、そっち（大迫など）から病院に来た人が、帰りにちょっとまち寄ってみて、お年寄りとかが上町のあたりに行って、少しこう、何か小銭落としていくとか、それはそれで回るじゃないですか。若い人は、それは多いですけど、私もお年寄りですけど、郊外のお年寄りが、おっ、変わってきてるよね、面白いよねって感じるようなことにもこれから考えていけたらいいなと。

小友：はい。そうですね。ありがとうございます。智彦さん行けたりしますかね、難しいですか？難しいっぽいですね。あれ、何分まででしたっけこれ。

中島：ぼちぼちですね。15時50分くらいで終わる感じ。

小友：小原くんは無いの？別に市の人と言っちゃいけないわけじゃないけど。

小原：業務とは全く関係なくなっちゃうんですけど、単純に、自分バンドやってるんで、いしがきに負けないくらいデカいまちなかフェスやりたいと思っています。

小友：絶対音楽の事いうと思ってた。

佐々木(大)：それはいいですね。どこでもそれをやりたいって頑張ってる人はいるんだけど、絶対に問題が出るというか、壁にぶち当たっちゃうのが、その消音っていうやつと、あと毎年開催する、開催に行くまでのハードさ。耐えられなくなっちゃう。それ仕事でできる人たちがいないと、ちゃんと長く続かないと思いますね。私もすごく音楽大好きで、フジとかいっぱいフェス行ったんですけど。

小友：あれ、大地くんと紘くんってあんまり繋がってないの？

佐々木(大)：すみません、今画面がちゃんと見えてないんですけど。小原くん、知ってます。

小友：地下で、大地くん音楽よくやってるよ。地下だからいくら音出しても響かないから。

小原：今度アンプとギター持って行きます。

佐々木(大)：いいですね。

小友：俺もやりたいからさ、今度やるとき教えてよ。いつもロビーの投稿で、今日音楽やってたんだって見てるから。けっこうセッションやってるんだよね。そこに、音楽好きなやつらが、毎週何曜日は何かやってるみたいな感じで。混ざりやすくなったりするのは全然ありますよね。

佐々木(大)：そうですね、いいですね。小友くんちょっと考えたのは、どこか空いてるところにスタジオ作っちゃうのとか面白いよなって思ったんですよ。

小友：作ろう作ろう。

山崎：ちゃんと防音してね。

佐々木(大)：そうそう。なはん（プラザ）がやってるじゃないですか。あそこね、早いんですよ、終わっちゃうのが。

小友：行政の施設だからね。

佐々木(大)：そうそう、しょうがないんだけど、やっぱりバンドカルチャーとか、音楽カルチャーとかがばっちりあるところはスタジオが夜中までやってるところ。

小友：あとは名物店主みたいなのがいないとね。

佐々木(大)：そういうの音楽には大事ですよ。

山崎：学生さんとかも使いたいと思うな。

小友：そうなんです。できれば、同じバンドメンバーで来て、帰って、っていう場所としての音楽スタジオじゃなくて、そこでこんな人いるんだって、その人と一緒にセッションしようとか。どうやって出会いが生まれるかとか、その設計がすごく大事だと思うんですよ。

山崎：名物店主がいてね。

小友：そうするとふらっと行きたくなりますよね。自分が暇だなんて思ったら、楽器持ってないけどあのおっちゃんに借りればいいやとか。

高橋(久)：そういうの新高さんとか関わらないんですかね。

小友：絶対いいですね。新高さん好きですね。

高橋(久)：スポンサーになってもらったり。

小友：いいですね。

山崎：ハイ、決まり。

小友：電気屋さんなんですけど、もともと楽器もやってたので。小友ビルの隣に、本社があるんですけど。

山崎：そうなんだ。全然いけるじゃん。

小友：マルカンビルの電気工事もやってもらってるんで。いいですね、こうやって地元の経済で。あとは

鹿討さんとかも好きだな。わからない人多いかもしれないですけど、ロータリーとか、50 ちょいくらいの方なのかな。ブレイクアウトルームがそろそろおしまいなので。こんな感じでね、色々出ましたね。

山崎：ありがとうございます。めちゃくちゃ楽しかったね。じゃあ、戻りましょう。

(グループA終了)

<策定委員グループB>

参加メンバー(敬称略)：照井智子、青木純、竹内昌義、長井謙、木村直樹、高橋潤吉、清水頭聖子、上田直輝、平賀恒樹、福田一馬、高橋亮、藤原啓昭、水上幸子

照井：盛り上がっていくんじゃないかなと思うので、我こそは、という方は発言してください。

いない。どうですか、アクション持ってる方いませんか。

青木：ダブル直樹さん、同じところにいるですかね。

照井：上田直輝さん、Lit Workplace に居ますか？

上田：はい。そうですね。実は、いつもは自分の会社で参加してたんですけど、こういった亮くんのお店もあるし、ここに来れば誰かいるかな、みたいな。リノベーションメンバーみたいな。そういった形で、来てみたところ、これまた面白いな、っていうね。こういったところから広がりが出てくるのかな、とは思ってましたね。

照井：いいな。私も行けばよかった。

高橋(潤)：Joe's Lounge なんです。

竹内：木村さんもぜひ、しゃべってください。

青木：僕の画面、直樹、潤吉。直輝です。

照井：あの、竹内さんと木村直樹くんの会話、面白そうだなと思って期待してたんですけど。

竹内：木村さんがまずしゃべってくれないと、突っ込めないの。しゃべってもらうのは、最初は木村さんですね。どういう風にしていくのか。

照井：では木村くんお願いします。

木村：おかげさまで、グループホーム、障害福祉のほううまく行ってまして。その間に、エコスクールの方も行かせてもらったので、それも建物に反映できて。それを今度さらに、売り込めているので、建築の方も、福祉の方も両立して、うまく行っているんですけど。そうすると、いろんなやりたいことも出てきて、今は、グループホームなんですけど、秋からは保育園を。子会社の保育園を、障がい者なんですけど、これをやろうと思っていて。やる準備をしているんですけど、まず第一案として、設計事務所を市役所が見えるところに移しました。それで、もともとあった設計事務所、自社ビルだったんですけど、そこを秋から保育園にするために、今事業計画を作って実行しようとしているところでございます。障がいの分野もまだまだやれることがあって、大人だけでなく、障がいを持った子ども、子どもたちが育って、住むところ働くところを作っていく、ということで、今障がいの分野で、世代を広げるようなことをやっていこうということで。今年は保育園を作ろうということで、新しい事業を始めているという状況ですね。こんなところでいいですかね。

照井：さすがです。

青木：それはあれですよ、まちなかにあえて作ってるっていうことですね。

木村：そうです。保育園自体は広い駐車場が必要だったので、僕の事務所にしたんですけど、木村設計自体がまちなかに来ました。小友くんの実家の隣に引っ越してまいりました。

照井：ありがとうございます。

青木：地域とつなげる、みたいなことは考えてたりするの？駐車場の関係で外には出たけれど。

木村：そうですね、スタートが前の事務所なんですけど、次の保育事業所っていうのはまちなかに作っていただければ、ということも考えているので、また、まちなかの人とのつながりを持てるかなと思って。失敗したくないので、まずは、外からやろうかなと考えてました。

青木：まちの人が教えに行くとか、そういうのがあったらいいよね。外にあっても。

木村：すごくいいですね。前も小友くんとの話で、おもちゃ美術館にボランティアでっていうお話もあったので、そういうところと繋がりながら、子どもたちもまちなかで遊べるようなことが起こればいいなと思っております。

竹内：事業もうまく行ってるというのがすごくいいなと思っていて、ぜひ木村さんを中心に、今日も委員の方でいっぱいいらっしゃっているんで、繋がってそういう動きが広がっていくといいな、っていう風に思ってます。

長井：グループホームも保育園も断熱ばっちりで？

木村：ばっちりです。保育園は前の会社使うので、まだちょっとなんですけど。今花巻市のちょっと南の方に諏訪っていうところがあるんですけど、そこにグループホーム2棟建てていて、それはもちろん高断熱高気密で、竹内先生の基本の、基礎 10cm、壁 20cm、屋根 30cm でやっていました。あと、花月堂ビルの前にもグループホーム建ててまして、エアコン2台で動かすような仕組みで。これは違うやつで竹内先生に教わったんですけど、空調もなるべくエネルギーを使わないようなものを、こっちは実験的にやってます。

竹内：エコタウン専門課程の時に、途中にいきなり「これどうですかね」って言われて、これ変えて下さみたいなことを言ってたんですけど、それを取り入れながらやったんですね。

木村：はい、工事途中に変えました。工務店に怒られましたけど。

照井：ありがとうございます。

長井：上田直輝さん、小ミーティングを経る中で上田直輝さんがよく言ってた、チャレンジみたいなことあったほうがいいんじゃないかっていう話があったんですが、今回最終的には、まずはやってみようというチャレンジを認め合ったり応援しあう雰囲気っていうことがもっと広がってほしいみたいなことがあったんですね。そういう観点で何かチャレンジ精神を広めていく、みたいなところで今後やっていくことはありますか？

上田：チャレンジできる場所だったりとか、そういう環境というのは元からあるのかなって思ってるんだけど、それをうまく活用できない中で、例えば今回の新しく作成された冊子だったりとか、そういったところから、チャレンジしたいというところが、もっと繋がればいいのかとか、そういったところがこれから面白くなっていくのかなと。そういったときに、初めはやりたいといった人に対して、応援したいっていう人が手を上げない限り、たぶん進めれないのかなって思うので、そういったことは経験を積んできているリノベのスクールの中から新たに誕生するのかなとも思うし、さっきの小友くんの話の中でも、遊びっていう部分を出してくっていうところは若者にとってもある種、我々40歳過ぎた世代にしても、魅力的なまちになるかなと、ちょっと思ってた。その一つが公園（花巻中央広場）ですよ。公園であっ

たりとか、大堰川プロムナードの、ああいったところをどう活用できるかというところにあらたなチャレンジをしてくれる人たちが参画してくれるというのが、面白いなとは思ってますね。

照井：公園の冬、今年はすごく雪が多かったので子ども達は遊ぶのにはよかったけど、イベントとかがどうしてもやりにくいことがどうしてもあって。でもせっかくできたあの場所を使い倒していくっていうのを、まだやれるような気がするの。そういう仕掛けを、どうですか、清水頭さん。今後の動きとかは。

清水頭：そこは、私たち BonD の中でも話は出ていて、タイミングよくカゲツドアーズさんもオープンして、トイレの心配とか、寒さとか雨の心配もなくなったので、あとはカゲツドアーズのオーナーの江美さんとも話はしていて、暖かくなったら、公園、カゲツドアーズ、上町・吹張通り、駅までの部分を使った何かを仕掛けなきゃいけないな、とは話し合ってます。仕掛ける中に、ちょっと興味がある人とか、やってみたいっていう人の背中をちょっと押してあげれるような、スクールの、このような時期なのでちょっと小さく始めていこうかな、ということは考えてました。

照井：3 ビズも前にやって、みんなけっこう女子たちが頑張っているのは見えていたのでああいう小さいのとかも、これからもずっと続いてくといいなと思ってたんですけど。

清水頭：3 ビズは、青木さんがよくわかってるように、3 ビズをもとに、岩手らしく、花巻らしく、ってすごく地方性が出てくるんですね。人のつながりであたりとか、できることできないことをって。こうやって雪が多いとできないこととか、そこの地域の人をどうやって集めるのが一番良いのかなっていうのを考えていくと、前回やった3 ビズのようにはいかないんですけども、あれをもとに、そういうスクールを出た人たちが公園でショップを開くとか、どこかの空き物件を借りて商売をしたいとか、何かスクールをしたいなっていう人たちのアドバイスの、基本的なことを教えてあげて、そういうことを事業にしている人たちに繋げてあげるっていう、仕組みは作っていきなと思ってました。

照井：楽しみです。今ガッツ（平賀）が到着しました。

平賀：すみません、遅くなって。

照井：一般参加者の方に飛んじゃってみたいで。お疲れ様です。

平賀：お疲れ様です。

照井：どこから聞いてました？後ほどケイ子さんから聞いてください。あと数分しかないですね。

水上：20 分まで5 分くらい。

青木：そのあとまだあるんだよね？

水上：そうですね。

照井：あとアクション持ってる方、どうですか。亮くんは、黒い、でっかい車。

高橋(亮)：キッチンカーですか？

青木：曲がり切れないキッチンカー。

高橋(亮)：そうですね、あれは今年は動きたいので、色々出現したいなと思ってます。使い人がいたら、そこも使うとか、貸し出しが出来ればして、許可も食堂で許可が取れてるので、割と色々出せるので。そういうこともやっていけたら面白いかなって。あと、イナカフェスを今まで童話村でやってたんですけど、まだ話確定じゃないですけど、それこそ公園のところとか、ステージ2 つ作って、まちを歩かせるような、まちなかでのイナカフェスをやろうかなと。アクティビティとか、出店者とかも集めて、やろうかなって企画してました。

上田：すごいね。今年は私、レモンサワーフェスをしたいので、ぜひ会いましょう。

高橋(亮)：レモンサワーフェス？

上田：そうです。レモンサワーオンリーのフェスを。

高橋(亮)：とんがってますね。参戦します。

照井：ありがとうございます。福田さんはどうですか？

福田：はい、今は特に何も計画はないです。今とても厳しいので、次にワクワクすることを考えるより、死なないようにすることを今考えています。なので、今この場に提供できる話題は持ってないです。

高橋(亮)：福田さん、俺もめっちゃやばい。

青木：大丈夫、やばくないやつ今いないから。

照井：みんな頑張ろうね。

青木：やばい時こそ明るく行こう。福田くんのシェアハウスはどうなったの？

福田：コロナが始まって、私が店に入るようになったので、完全に止まってて。かれこれ半年以上止まってて、あと1、2か月は入れれば終わるっていう感じなんですけど。

青木：現場が終わってないんだ。

福田：そうです。観光業が復活してきて、人を使えるようになったら、私が現場入るかなっていう感じです。そういうタイミングも。未来の話としては、シェアハウスが一番近い未来の話ですね。

青木：もう亮が作りに行っちゃえばいいんじゃないの。

福田：俺よりも忙しいじゃないですか。

高橋(亮)：手が欲しい時、物持つくらいなら、丸ノコとか。一緒に頑張ろう。

福田：ありがとう。

青木：住人が入れば、安心するよね。

福田：そうですね、今のところの計画だと、今借りているお金はシェアハウスの売り上げですべて返済できるような計画にはしてるので、タイミングですね。とにかく日々の売り上げが増えれば行ける。

竹内：暖かくなって来たらだいぶコロナも収まってくるんじゃないですか。

福田：そうなるの良いですけど、まだちょっと今はワーツと動けない状況ですね。

照井：ありがとうございます。そしてこの今のグループの話をなんとなく、戻った時に話をしなければいけません。誰がいいかな。あと2分しかないの。今の話をまとめて話してくれる人いませんか。上田直輝かな。

竹内：それがいいと思います。

照井：今の話をかいつまんで面白く、みんなに報告してください。ぼちぼちですかね。

水上；右下の退出を押していただければ。

照井：ではみんなみなさんで退出して戻りましょう。

(グループB終了)

〔一般参加者のグループ〕

伊藤(ケ)：みなさんこんにちは。花巻市役所の伊藤と申します。よろしくお願いします。皆さん元気です

か、はじめましての方もいらっしゃいますけど、お久しぶりの方もいてすごくうれしいです。冒頭にですね、ぜひみなさんに見ていただきたい動画があるので、こちらのほうを共有させてください。

（花巻中央広場 冬のイベント時の動画）

音を伝えられないんですけど、実はこれは音があるプロモーションビデオです。花巻中央広場というところが広場として完成して、そのこけら落としというか、どんな風にこんな場所にしていきたいよね、っていうことを実験した時の状況になります。冬の2019年12月の冬晴れの素敵な日にクリスマスリースを飾りまして、テントを張って焚火をして、子どもたちと冬でも遊べるまちってかっこいいよね、っていう形でやっているものです。コーヒーもこうやって、お湯をそこで沸かして、クッキーもその場で焼いて。これ断熱ハウスを作って、サンポットさんの協力を得て、ヒーターを焚いておもちゃ美術館の体験コーナーを作ったりしました。子どもたちが喜んでくれた冬晴れの日でした。キャンドルはリサイクルで、結婚式などで余ったものをビンに流し込んで、子どもたちにビンに絵付けをしてもらいました。このとき150個くらい作りました。オープニングセレモニーの後、だんだん夜が更けていくんですよ、そしてキャンドルを灯して…、というものでした。音楽がお伝えできなくて申し訳ないです。こういう動画を花巻市と㈱BonD Planning という民間と一緒に、こういった広場や公共空間を作り上げていこうという取り組みが始まっています。

先ほどですね、小友さんのほうからバーツとお話をいただいた、リノベーションまちづくり構想という流れ。魅力的なまちを作りたい、まちの主体者を増やしたい、この2つです。魅力的な街ってというのは、黙っていれば作られるものではなくて、考えて行動して盛り上げていく、私たち市民が力を出し合いながらやっていく、ということが魅力的なまちにつながっていくということなので、誰かに頼んで誰かに作ってもらうのではなくて、自分たちから作り上げていくものなのだとすることを整理したものです。その整理した中に、どんなものの視点が重要なんだろうねっていうのを示したのが、今回のリノベーションまちづくり構想になります。

この場所では、たくさんの方がおいでになっていて、いろいろな立場の方もいるんですけど、前もってアンケートにお答えいただきながらエントリーしていただいている方がいるので、その方々からどんなふうにしていきたいですか、っていう意見をいただいていたので、その話を深堀りしていきながら、（委員が）25分後に引き戻されるので、「私こんなことに参加したいんだよね」っていうことがあったら、ぜひお話をしてもらいながら、やりたいと思っています。よろしくお願いします。皆さんが全部が全部ここで話してできないと思うので、グループチャットのほうに、ぜひ書き込んでいただければと思います。早速なんですけど、お話を伺いたいと思う方がいるんですけど、ミュートを外してご発言ください。左藤さんいらっしゃいますか。いらっしゃいませんか。何か感じた方いらっしゃいましたら、ご発言いただきたいんですけど、阿部さんいらっしゃいますか？

阿部（一般参加者）：ご無沙汰しています。

伊藤（ケ）：リノベーションスクール1回目の受講生ですね。あの時は、金子ビルの1階と3階というちょっと難しいお話であったんですけども、そこから事業が生まれてゲストハウスというものが、あの時がきっかけで生まれたんですよ。今回あれから時間がたって、構想という話になっていますが、どう思われたか、ということと、これから阿部さんが考えている未来への展望をお話いただければと思うのですが。

阿部（一般参加者）：私は岩手県奥州市にいますけど、小友くんがリノベーションまちづくりの手法

を水沢で講演する機会がありまして、先ほどの動画のように、小友くんが、今花巻のリノベーションスクールを経てこういう風に変わってきているよと、その時は聞いていたんですね。花巻に関しては私自身は参考にさせていただいているという感じでして、本日は細かい経緯を、わからなかったところまでちょっとずつお話しいただいたり、これまでの議事録を拝見して、見ているところでした。私個人としては、水沢での小友くんの話に感化された人が結構いるっていうのをこの前わかりまして、講演会でも小友くんは私の名前を出して、水沢だったらまずは阿部さんに話をしよう、ということがあってですね。おかげさまで、まちのために何かやりたいけど、何か具体的にやりたいことがないんだ、という人たちがちらほらいまして。そういった方々を集めて、条件が揃ったら、水沢でもリノベーションまちづくりスクールを開いて、思いを形にしたいなど。そして、花巻のように民間主導で、新しい人の流れとか賑わいを作っていきたいなという風に思っています。

伊藤(ケ)：こうやって仲間を集められて、今回みたいにああでもないこうでもない、というのはスクールの時のような雰囲気って、苦しいんだけど楽しいじゃないですか。そういうところからまちって変わるんだなっていう風に私も思います。共感します。

では、高橋瑞樹さん、ですかね。こんにちをはじめまして。お話しいただいてもいいですか？いま取り組まれていることもあるということですが。

高橋(瑞) (一般参加者)：初めまして。今回初めて参加しています。勉強のつもりで来たのですが、話す機会があるとは思わず、緊張しています。よろしくお願いします。

伊藤(ケ)：いま関わっている、関わっていききたいということですが。今関わっていることについてお話しいただけますか。

高橋(瑞) (一般参加者)：はい。花巻市の桜町でデイサービス、高齢者の介護施設、日中だけのサービスを経営しています。まちづくりへの参加という部分で、ほとんど若い世代が中心になっているような雰囲気があるんですけども、人口の3分の1ぐらいの方は高齢者の方なので、そこからまちづくりに間接的に関わっていけるきっかけというのが何か作れたらいいな、という風に思って、デイサービス内でご利用者さんがまちの事業者さんの仕事のお手伝いをするというものを最近始めたところでした。具体的にはですね、近所に学生服をリユースショップがあるんですけど。寄付であったり、買取で寄せられた学生服のボタン付けであったりとか、小さい修復を実際にご利用者さんがされていて、店舗でも販売されているという具体的な事例もできていてですね、小さく始めてはいたんですが、そういう形で何か参加できることがあればいいなと思って今回参加した次第です。

伊藤(ケ)：ありがとうございます。そのアイデアは瑞樹さんがお考えになったんですか？

高橋(瑞) (一般参加者)：そうですね、完全にボランティアという気持ちではなくて、もちろんデイサービスにとっても特色あるサービスになるのかなと思っていますし、事業者さんにとっても無償で提供しているので、少なくともちょっとお手伝いできているのかなというのもありますし、ご利用者さんが80歳、90歳になって役割があるのがすごく活力になっている、ということが実際にデイサービスの現場から体感しているところだったので、すべての関係者にとってメリットがある形になれば、続けていきたいなと思ってやっていますね。そういうことを考えて始めたところでした。従業員と考えてスタートしたんですけど。

伊藤(ケ)：すごいですね。今のお話を聞いて阿部さんどう思いますか？ こういうところから始まる、す

ごい発明だと思うんですけど、こういう話って水沢でもできそうじゃないですか？

阿部（一般参加者）：そうですね、その通りですね。

伊藤(ケ)：自分と立場の違う異分野の話だったり、デイサービスということだったので課題がいつも認識されていて、これを解決したいなというところから生まれてくることってあると思うので、それは民間も行政も一緒だなと思っていますね。

内田さんも今、スクールOBで、仕事と両立しながらいろんなことをやっているんですけど。これからこの構想を利用するとなると、こういったことが考えられますか？

内田（一般参加者）：よろしくお願いします。私は今東京で働いていまして、出身が花巻。2017年度のリノベーションスクールに参加していて、学生時代まで花巻で住んでいたんですけど、その時から高校生さんと地元の若い人を巻き込んでまちづくりとか、社会教育みたいなものを行っている者です。公私ともに色々やっています、プライベートのほうでは毎月地元の高校生を（オンライン上で）集めて、花巻で何かプロジェクトをするときに面白くするにはどうしたらいいか、ということを一年間通して「イーハトーブまち塾」というプログラムをやりつつ。仕事のほうでは、地域プロモーションの仕事をしていまして、花巻の魅力発信サイトの「まきまき花巻」というサイトを花巻市さんと一緒に運営していたりして、そういったことが、この場での取り組みとか、外への認知がまだ広まってないと思うので、発信していったり。若い人もこの場に呼び込んで、もっと大きくしたいなと思っています。それと私事なんですけど、今年、花巻市さんの協力隊になることに決まりました。

伊藤(ケ)：決定ですか？おめでとうございます。

内田（一般参加者）：すぐ、というわけではないのですが、秋口くらいから。特定の任務に就くとかではなくて、こういう私のやりたいことをなるべく汲み取ってやれるとのことだったので、そういう、若い人のまちづくりとかですね、社会とつなぐ接点づくりをより強化していきたいと思ったので、この場の皆さんにもぜひ使っていただけたらと思います。よろしくお願いします。

伊藤(ケ)：ありがとうございます。阿部さんと内田さんは1回目のリノベーションスクール（受講生）だったし、あれがきっかけで例えば亮さんのビールとか、ゲストハウスだとか、朋美さんのクレープだったり、照井智子さんのココアルバだったり、っていうところにどんどん派生していったのもあって、同じ空気を吸った人たちですね。

今学生さんと絡みながら、ということがあったんですけど、多田さんいらっしゃいますか。初めまして。

多田（一般参加者）：こんにちは。

伊藤(ケ)：お話ししていただいてもよろしいですか。

多田（一般参加者）：遠藤先生のゼミの活動で、銀河の里のほうで地域内エコシステムの実証試験をお手伝いさせていただきまして。銀河の里さんの土地のところで、チップパーを使って、高速道路などで出てくる支障木をチップにして幹とか枝とか、葉っぱ付きのものも一緒にして、チップの質やできる量など、試験を行いました。

伊藤(ケ)：やってみてどう感じましたか？

多田（一般参加者）：そうですね、結構重労働で大変だったんですけど、支障木とか、そういう廃棄物になるということだったので、そういうものがチップとか活用できるようになるのはいいなあと思いました。

伊藤(ケ)：吉田先生から、地域のエコシステムもそうだし、経済のことについて、ちょっとだけ、いま取り組まれていることを。構想の中に少し反映させていただいているんですけど、そのあたりについてどうお感じになるか。

吉田（一般参加者）：どう答えたらいいかわからないのですが、こちらに来て一番最初に、地域の異業種の皆さんですね。花巻の青年会議所の方々になるかと思うんですが。お話をした中で、自分のところの強みとか弱みとか。あるいは自分のところの SDGs のことで、どう環境問題に関わっているのか。あるいは地域活性化を本当はやっているはずなんだけど、何に関わってきているのかということが、外側から見るとわかり易いけど、内側からだとかわりづらい、ということがたくさんあるんですね。まずはそれを認識するところから始めていこう、ということで SDGs のラベルを貼ることから始めていこうというようなことを始めて。それを今度みんなで理解していく中で、じゃあ自分のところに足りないものはどこなんだろう、と。環境でも地域活性化でも、なんでもの分野の中で実はこういうことをやっていたんだよと。やっていたんだけど、わかっていなかったんだと。それにラベルを貼って、これをやってるじゃないですか、ということをやっていけば、みなさんがそこで新しい職種外の、脳のシナプスじゃないですけど、これやったならこっち行こう、これやったならこっち行こう、と色々繋がっていくことができるかなと。そのお手伝いをしようかなということを考えていて、それを遠藤先生と協力しながらやっていこうかねという話がありまして、それで参加させていただいているというのが今の状況です。

伊藤(ケ)：ありがとうございます。今日は富士大の学生さんもいっぱい入っていただいている、ありがたいなと思っているんですけど、今、多田さんが言ったように、現場に行くと、これが経済の循環につながるということが学術的に富士大として勉強しながら、事業としてお金の話もしながら、というのはすごいいい学びになるんじゃないかなと思っています。細越さんがいっぱいいうなずいて下さっているんですが、細越さんラストなんですけどコメントをもらってもいいですか？

細越（一般参加者）：はい、4年間一緒に遠藤ゼミに担当することになりまして、あと岩手大学で連携しながらやっています。

伊藤(ケ)：遠藤先生のところでやっているということですね。学問だけではなくて、手で触りながらやる学びというのは入り込み方が違うと思うんですけど、まちづくりも全く一緒に、机の前に座ってても何も起こらなくて、現場に行くと、経営者の方と話をしながら一緒に組み立てていくということが起こっています。

最後にすみません、牛山さん、遠くからご参加いただいてありがとうございます。オフィスをリノベーションしているということなんですけど、新しい魅力を作り出すことを普段からされているということなんですけど、花巻のこの構想をさっと聞いただけですが、なりわいとカルチャーとか、職や住を入れているんですけど、どのように感じましたか。感想を一言いただけますか。

牛山（一般参加者）：地元の方でもこうしていきたいという気持ちを持っている方がいるんだ、ということを知ることができて、今日はみなさんどういう風にしていきたいのかが聞けたらいいなと思っていました。私は仕事で花巻に関わることがあったので、全然それまで縁がなかったんですけども、あそこに住んでいる方が何を欲しがっているのかとか、そういうことを聞くことができたのですごく良かったなと思っています。

伊藤(ケ)：東京の方からも注目をいただいてうれしいです。

ブレイクアウトルームが終わって皆さんこちらに戻ってきたというところですね。

大部屋組もあっという間に 20 分が経ってしまったので皆さんのお話しとか全部聞けなかったんですけど、ぜひ、チャットとかのほうに感想などを書き入れながら、お願いしたいと思います。

では照井さんよろしくをお願いします。

5. 共有

照井：みなさんお疲れさまでした。おそらく各チーム盛り上がって色んな話が出たと思うんですけど、それぞれのチームのまとめを共有したいので、それぞれ発表をお願いしたいのですが、Aチーム、小友さんのグループはどなたが発表されますか。

小友：誰が発表するか決めてなかったんですけども、僕言っちゃいますね。かなり盛り上がりまして色んな事が出たんですけど、順不同でバーツと言うと、スケーター達が花巻に住みたいと言っているらしいので、その人たちが住んだり定期的に止まっていける場所を作っていこう、とか、キオクシアっていう、北上にできた東芝系列の工場があるんですけど、そこの人たちが孤独だったりとか、休日やることがないっていうことを聞いているので、その人たちと交流できる場所を作っていこうということ。スケボーだけじゃなくて、カゲツドアーズ使ったりしながら。あとは富士大生と、スケボーパークだったりカゲツドアーズだったりと交流できるよね、っていう話も出ましたし、Dprtmnt に来ている子どもたちが隙間時間で宿題したいっていうニーズがあるみたいなんで、そこをカゲツドアーズ使おうとか。あとは久美子さんが保健指導している人たちが、暇だとか休日 YouTube 見てるだけみたいなのところを、花巻のまちなかの面白いコンテンツあるよっていうことを引っ張り出してきて、居場所を作ったり、新しい活動拠点を作る。直樹さんは釣りを使ったツーリズムをやりたいっていうから、さっきの、久美子ハブ、って呼んでたんですけど、久美子ハブによって繋がった人たちを釣りに連れてってみたいとかをやっていこう、とか。あとは、色んな所で働く人たちが、自分がアクティビティとして楽しむだけでなく、ボランティアとして楽しむ、活動する場があると面白いから、おもちゃ美術館のボランティアだったりとか、自分ができることを活動のボランティアとしてやってもらうみたいなのもいいよね、と。あとは、僕はマルカンビルの屋上に温泉作りたい、とか。まちなかで音楽フェスやったりとか、まちなかに音楽スタジオ作りたいって言う小原紘がいたりとか。新高(電気)さんとか、鹿討さんとか、こういった活動に混ざっていない人にスポンサーしてもらったり、混ざってもらっても音楽だったらいけるよね、みたいな話をしました。以上です。

照井：ありがとうございます。では、うちのチームのはですね、なぜかダブルナオキがいましたので、二人まとめてしゃべって下さい。

上田：私からで良いですか？

木村：上田直輝くんがしゃべります。

上田：どうもお疲れ様でございます。我々のグループだったんですけども、先ほどAグループの話にあった通り、キオクシアの話やスケボーの話は出てきてはなかったんですけども、お互いの近況であったりとか、新たな可能性というところでは、すごく活発な議論が出てきたのかなと思っておりました。その中で、まちなかの活用の一つとして、私のほうのグループというか、私の個人的な意見もあるんですけど、

公園(花巻中央広場)をどう活用していくか、ということが一つキーワードとして出てきてもいいのかなという中で、チャレンジする人と、そのチャレンジすることを協力する人というところが、一つのセットになれば形にもなってくるのかな、っていう風には自分の中では思っておりまして。今日参加されているほとんどの方っていうのは、アクションをかけて、一回チャレンジしている人が多い中で、改めて新しいことをしたいって思ったときに、じゃあどこに行けばいいだろう、っていうのが、今回我々が作成したリーフレット(ビジョンブックの冊子)に詰まっているので、これをどう広げていけばいいのかっていうと、チャレンジ、新しいことをやりたいという人に対して応援するスタイルっていうのを確立できればいいと思うし、その中の一つが、お金のかからない、いわゆる公園っていうか、大堰川プロムナードだったりとか、そういった場所ってチャレンジしやすい場所になっていくのかなって思っております。今清水頭さんとかが色々事業とか、コーヒーフェスとかやっていたりとかしているんですけども、そういったものを若者がどんどんやりたい、っていうことを増えてくるとまた一つの形になるのかなと思っております。亮くんのキッチンカーも、前回見せていただいたんですけども、貸し出しOKということなので、私はそれを借りて、レモンフェスをね。盛大に開催したいなと考えておりまして。

照井：レモンサワーフェスね。こっちのチームは、たぶんレモンサワーフェスのことしかない、っていうくらい盛り上がった。

上田：若い子、20歳くらいから60歳まで、レモンサワーを嫌いな人っていないと思うんですね。

木村：こちらからは、以上です。

照井：ありがとうございました。では、大部屋チームお願いします。

伊藤(ケ)：私書記するので、福島さんしゃべってもらってもいい？

福島：はい。初めての方もたくさんいらっしゃったのでなかなか意見が出づらかった、ということもあったのですが、若い人たちだけじゃなくて、高齢の方もしっかりとまちにコミットしてお役に立てるようなこともやっていますよ、というお話も聞けました。あとは、富士大学のほうでも、色々研究をされていて、いらなくなった木材をとかをチップ化してどのくらいの量がでるのか、という環境に配慮していく、SDGsというところにも繋がるんだと思うんですけど、そういった研究も富士大学のほうで始めているということで、森林資源の多い花巻市ですので、ぜひそういったところも若い人と、昔からずっといらっしゃる方々と一緒になって、地域資源を掘り起こせていけるといいのかな、という感じは持ちました。以上でございます。

伊藤(ケ)：補足するんですけど、内田くんが地域おこしとして、花巻にまた動きを起こせそうな状況になっているということと、阿部さんが、水沢で仲間が集まり始めて何かを起こそうという話になってきたというところですね。今回、東京のほうからも、また、成田さんありがとうございます。横浜からも花巻に関心を寄せていただいて、花巻の面白みみたいな、コアな感じを聞いていただいているということで、花巻も注目されてきています。みなさん、頑張ろうね、ということです。以上です。

照井：ありがとうございました。今出た話をこうダーッとメモしてもらってるんですけど、あんまりピックアップできてないような気がするんですけど、青木さんもちょっと何か、面白い話がいっぱい出た気がするんですけど、補足していただだけませんか？

青木：はい。木村くんは障がい者のグループホームもすべて断熱でどんどん増やしているし、今度保育園

事業もスタートするという事で、そこまちなかをどう接点を作るか、というところも今後の展望として楽しみなところ。おもちゃ美術館でボランティアしたりとか、逆にまちなかの人たちが、ちょっと外にある障がい者の、保育園の保育施設に教えに来たりとか。そういう接点もあるんじゃないかなと思うし、中央広場の周りをどう生かして使っていくかということ、特に清水頭さんなんかは、今までやってきた3ビズの流れなんかも使いながら、新しい小さなチャレンジを、中央広場と近くの花月堂ビル（カゲツドアーズ）の連携を取りながら、屋外だけじゃなくて屋内もセットで使えることでなんか新しいことが色々できるんじゃないかなと思います。キッチンカーは、何がすごいかって、食堂の機能をとっちゃってるってことですよね。だから、店舗をわざわざ作らなくても1日からでも飲食店を始められるものがすでにあるってことが最大のことであって、で、あれは大きすぎるんで、運転していくのにはかなりハードルがあるので、逆を言うと、中央広場の一角をうまく活用しながら、日替わりで色んな人たちがチャレンジできるような、そんな状況が生まれてもいいと思うし、さっきの田舎フェスの話は、まちなか全体をフェスとして使ってしまう、という方向になれば、面白くなるなあとと思うし、コロナが少し落ち着いたら、例えば今回参加しているガッツくん（平賀さん）も、まちなかだけじゃなくて、周辺部の農村だったりとか生産地でも、そっちともフェスをやってあったかい季節であれば自転車でそこを移動できるような状況も生まれたりすると、もっと花巻を立体的に捉えられて、面白くなるんじゃないかなって感じました。

照井：ありがとうございます。今、どんどんチャットに書き込みしていただけてますけど、このメモを見た感想とか、こんな話も出てみたいなこと、思っていることをどんどん書き込んでほしいと思います。もうちょっと時間があるので、山崎さんはどうでしたか？

山崎：はい。めちゃくちゃ楽しかったですよ。僕のグループは、まだまだ時間があったらアイデア出たのかなと思ったんですけど、やっぱり連鎖反応がすごく面白くてね。一人のアイデアから他の人のアイデアが出て、それが繋がって、それからもう一つアイデアが生まれて、そこにまた誰かがアイデアをかぶせてみたいみたいな感じで。すごく、花巻ってこんなに盛り上がってたんだ、みたいな再認識をしました。その部分ですごく感動したのと、さっき青木純さんが言ってたように、やっぱりまちの色んな所を色々な用途で使い倒す。特にまちなかですよ、一番集まるところを、多様的に使い倒すっていうのが、僕はいいと思っています。僕が以前住んでいたポートランドという町も、リーマンショックで一回ズタズタになったんですけど、そこからキッチンカーブームを起こしてですね、一時期まちなかに750台くらい、キッチンカーがあるということになったんですね。それは何故かっていうと、ガラガラの中心地のダウントウン、駐車場がガラガラなので、寂しいからそこにキッチンカーを停めておくと、オーナーさんは月極である程度お金は安いけど入るっていうのと、事業者の循環。人々が安く始めて、うまくいったら店舗を持てる。そしてお互いのぎを削って、色々なレシピ、材料とかを共有する、そういうレストランオーナーになりたい人のコミュニティみたいなものができたんですよ。そのつながりがすごく良くて、なおかつキッチンカーのディーラーさん、キッチンカーを作る人たちもどんどん成長していったし、そうすると修理工とかそういうところをも忙しくなるし、色々なことがそこから起きたので、キッチンカーの集落だけ見に来るような海外旅行者もいたくらいなので。そういう小さなことがコツコツ積みあがって、連鎖反応を起こしていくのが、すごくいいのかなと思いました。それがすでに起きているので、これからまた花巻に行くのが楽しみになりました。ありがとうございます。

照井：ありがとうございました。もっと時間があつたらどんどん（アイデアなどが）出てきて盛り上がっていきそうなのですが、一旦ここで、メモ書きはいいですか、ケイ子さん。大丈夫ですか？

伊藤(ケ)：いいですよ。

6. 総括

照井：ではちょっと早いんですけども、スケジュール上、総括の時間になっているので、外部委員の方から総括のコメントを一人ずついただきたいと思います。お一人5分程度でも大丈夫です。今までの、花巻で起こった色んなこととかを思い出していただきながら、お願いしたいんですが、まずは竹内さん、お願いできますでしょうか。

竹内：みなさんお疲れ様でした。これが最後だと思うとちょっと寂しいんですけど、色んな所で動きがあるよということで、木村直樹さんが代表として、という形でお話しされてますけど、実はそういうことを考えながらやっている人は、彼だけではなくて色々考えてらっしゃる方たちもいて。衣食住と言われていくところの住の部分是比较的お金がかかって重い部分ではあるんですけど、暮らしやすい暮らしを作っていくというのはすごく大事な事かなと思っています。それがいま少しずつ、種を蒔いて芽が出てきている状態と思っているので、もう少しそういう流れが大きくなって、民間と公共の両方で色んなことができてくるようになるともっと楽しくなるなど。今そういうところの仕込みが終わった段階だなと思っているので、そこをもう少し育ててあげて、もっと大きなうねりというか、住環境の改善みたいなものっていうのは、さっきのスケーターが住む場所がないよね、っていうところからもありますけども、色んな場所があると集まれたりとか、機会が増えたりするので、どんどんそういうのが動いていってほしいなと考えています。今、福田さんが大変な時期で、っていう話、コロナの影響をまろに受けて大変そうなんですけど…。やっぱりリノベーションっていう部分ではそれこそ小友さんの家をやったりだとか、色々知っているような話もあって、今度それが横に広がっていくと、まちなかの空き家をどううまく使っていくかという時にも、住環境というか、建物の環境にも、どうするかというのはすごく大事な事なので、役立って、みんなが住みやすいまちになっていくと、いいじゃん花巻に住もうぜっていう若い人がどんどん増えていくんじゃないかなっていう風に思っています。引き続き頑張ってもらいたいと思いますし、何かありましたら、お声がけいただければ断熱は大事だという話はしに行きたいと思います。どうもありがとうございました。よろしくお願いします。

照井：ありがとうございました。では続きまして、山崎さんお願いできますか。

山崎：ありがとうございました。僕は、途中から入ってきた委員なんですけど、コロナ前に一度花巻に伺って、それ以来伺えるチャンスが無かったので、次行って皆さんにお会いできる時が楽しみだなと思います。こういった構想の計画というのは、未来の計画で、未来のために力を合わせて作るものなんですけど、偉い学者さんがね、未来を予測する一番いい方法は自分で未来を作ることだ、と言ったんですよね。こうやってみんなが話し合って、自分たちの欲しいものをコミュニティとして、グループとして考えて、作っていこうとする行為が一番確実な未来を作る原動力にもなるし、方法ですので本当に素晴らしいと

思うんですよ。これをちゃんとパンフレットのような、ドキュメントに残して色んな人に見てもらえて、共有してもらえ、それを実際にまちに出た時に感じられるっていうのが、一番の未来の実現性になるもので、本当にうまく行ってるなと思いました。こうやって、これからすぐにできることと、長期的にやらなきゃいけない、構造を改革するようなね、いろんな人が入ってきて難しい時期になるかもしれないし、コロナもまたひどくなるかもしれないし、全然予測できないこともあるんだけど、それは世界中どこも一緒なので、花巻のために、花巻の楽しい未来をこれから皆さんで作っていけるのかな、と実感しました。そのチームに少しでも入れていただけたのですごくうれしかったです。ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

照井：ありがとうございました。ぜひ、花巻に来て、レモンサワーと一緒に飲みましょう。

山崎：レモンサワー以外にも飲みたいですけどね。

照井：そうですね。では、最後になりました。青木さんお願いします。

青木：みなさんお疲れさまでした。僕は2018年の9月27日に花巻を訪れて以来、けっこう毎月とか、多いときは月に2回とか、かなり行っていたので、これだけ花巻から遠ざかったことってこの3年間でなかったことなんですよね。だから今はとにかく花巻に行きたいです。花巻の良さっていうのは、花巻でしか作れない良さだと思うんですよ。今チャットの中でも、地域史みたいな話も合ったけど、花巻の地域の今までの積み上げとか、花巻というまちだから起こってきた事実の先に未来は起こってくると思うんですよ。懐かしい未来、っていう言葉もあるんですけど、その地域だからこそ育まれる未来っていうのも必ずあって。だからこそ地域の人に受け入れられるんだと思うんですよ。それは花巻じゃないとできないことだと思うし、それをやるのはここにいらっしゃる皆さんだと思うんですよ。僕は、まちづくりっていう言葉に長く、近くにいるんですけど、どうしてもやっぱりなかなか自分の中でまちづくりっていう言葉を、胸を張って言えないですよ。ちょっとした違和感があって。まちっていうのはハードで作るものでもないし、誰かがえいやっ、って作るものでもないし。まちの関係づくりっていうのを今回花巻の取り組みを通してすごく感じていて、これだけの人が今日、このちょっとした20分くらいの間のブレイクアウトルームで出てきた発表聞いても、それぞれの関係性で生み出されていることを話している感じがするんですよ。この人の取り組みとこの人の取り組みを掛け合わせるとこうなるよね、とか。あの人と一緒に手をつなぐとこんなことが出来そうだよっていうこととかっていう話が多い気がしていて、そこに価値がある取り組みだったんじゃないかという風に思いました。それで、よく点を面に、っていう言葉があるんですけど、点を面にするっていうのは、仕掛ける側の言い方であって、自分たちでやってる人たちにとってはあくまで点が面になるしかないんです。それぞれのやってきたことの点が、この関係性によって面になっていくことで、多くの人に伝わって、それが新たな文化、カルチャー、なりわいになっていくんじゃないか、と思うので、その個々のビジョンの集積というものをこれから先、このビジョンブックができた後に、どんどん追加していけたら良いんじゃないかなと思います。僕も自分のまちでまちづくりというものに関わっていて、ビジョンってすごくありがたいんだけど、なにもビジョンにすべて縛られる必要もないなと思っていて。ビジョンっていうのは大きな思想であって、立ち返るきっかけ、拠り所だと思うんですよ。あくまで実践するのはみなさんであって、それぞれのやりたいことの先に、どんどん突き詰めてチャレンジしていくと、結果としてそれをこういう場で共有しあうことで、また新たな提案が生まれてくってことになると思うので、このビジョンブックは多くの人の歩み寄りき

かけになれたらいいんじゃないかなと、思います。色んな意見が必ず出てくるので、その時に自分の主張を説き伏せるのではなくて、相手の主張と自分の主張をどう結び付けあおうかという考え方でいくと、公民連携ということももっと発展していくと思うんですよね。僕も自分の立場で、民間の立場でいるときには、どうしても、行政の人わかってくんないな、とか。なんでこれが伝わらないんだろう、とか。なんでやってくれないんだろう、と思うことはすごくたくさんあったんですけど、3年間やってきて、今年4年目なんですけど、そう思っているうちは何も変わらなかったな、とっていて。こっちも相手に伝える努力をしていなかったんじゃないかなと、思ったりもするんですよね。それでも3年間ずーっとやっていると、やっぱり理解をしてくれ始めていて。自分たちの言葉以上に、行政の皆さんが自分たちの取り組みをうまく表現してくれるような変化もあったりして、こういうことって長く組み合わせさせてやっていると、変化することもあるんだなと、成熟することもあるんだなと、最近自分自身も身をもって体験しています。

ですので、関係性を作るというのは、お互いがお互いの関係性をどう生かしていくか、ということを考えながら、自分のやりたいことをちゃんと前に進めるために、言い方悪いけど、相手をうまく利用・活用することも大事だし。相手の人が自分のやりたいことを、自分以上にやりたいと思ってくれるような、きっかけ作りも場合によっては必要なかもしれない。そんなことがこの取り組みの先に出てくるといいなと思うし、たぶんその状態はこのビジョンブックで目指している、わきそだつ花巻という、わきそだつ状態を作っているんじゃないかなと思います。

この議論をする中では、花巻から離れている方だったりとか、花巻に生まれ育ったんだけどちょっと違うところで仕事していていずれ花巻に戻りたいとか、今日東京から参加されている方もいるって言ったけど、花巻に関心を持ってる人が花巻の外にもたくさんいるわけですよ。そういう人たちにとって、離れているし、知らないけれど、背中が身近にあるような、そういう状況をどう作れるか、そのための接続部分として、このビジョンブックがあって。富士大学のほうで始まる、学びの場があって、学びあいもあって。このコロナ禍において、誰も予測できない未来なので、今までやってきたことの先に、懐かしい風景の未来を、新しい日常として、公共空間とか屋外、密にならないスペースを使いながら、花巻の町ぐるみでやっていくことが出来れば、花巻の新たな可能性を感じた人たちが、たくさん帰ってくるきっかけになるんじゃないかなと思ってます。それは全9回の構想委員会やりながら感じてました。

なんかやっぱり花巻に居たいですね。花巻の外からこの話をしているんじゃなくて、花巻にすぐ行きたいな、と思うし。ただ、いずれ戻ると思いますので、花巻に行けるきっかけになれば寄りたいし、イナカフェスやってて、レモンサワーで乾杯できればと思ってます。ありがとうございました。

照井：ありがとうございました。少し時間に余裕ができたので、みなさんの笑顔のスクショを撮りたいと思うんですけど、よろしいでしょうか。できるだけ顔出しをしていただいて、できれば一瞬マスクも外していただいて。小原くん合図してくれるかな？

小原：大丈夫です。皆さん笑顔キープをお願いします。OKです。ありがとうございます。

照井：ありがとうございました。いい記念写真になれたと。本当はみなさん集まって本当の写真を撮りたかったんですけど、このご時世なので、残念です。いいですかねケイ子さん。ちょっと時間ありますけど、予定通り終わります。

では、以上を持ちまして、第9回花巻リノベーションまちづくり構想策定会議を終了させていただきます。本日は長時間にわたり、ありがとうございました。委員の皆さんには長年にわたり議論を重ねていた

だき、本当にありがとうございます。これからも引き続き、みなさんと色んなワクワクを作っていきたい
と思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

終了（16：30）